

夏山の定番？ 赤岳

実施日 平成17年7月16日(土)~17日(日)
曇/晴れ

リーダー 涌井 良明

参加者 飯島義江、吉田正之、岩井康子、小池述史、馬場清士、涌井良明、木代久雄
ゲスト 小松勲、小松月子、藤田具子、金田彩恵子、鈴木由美、千葉恵子
会員7名 ゲスト6名 計13名

コースタイム 1日目 茅野駅(9:48~10:20バス)美濃戸口(11:12~11:24)美濃戸山荘(12:25~昼食 12:40)休憩(13:28~33)休憩(14:00~10)行者小屋(15:55泊)
2日目 行者小屋(6:15)展望荘(7:25~33)赤岳(8:19~40)文三郎分岐(9:08~20)行者小屋(10:13~昼食 11:00)休憩(10:50~57)休憩(12:41~46)美濃戸山荘(13:00)美濃戸口(13:45~14:48バス)茅野駅(15:47)

費用 交通費 新宿~茅野(往復 11,740円)
茅野~美濃戸口(往復 1,800円)
宿泊費 行者小屋(2食付)8,500円
費用合計 ¥22,040

前日まで悩まされた雨の心配も、終わって見れば夏の八ヶ岳を味わえた山行になった。総勢13名で無事終わることが出来、参加して頂いた皆様に感謝です。

曇空の茅野からバスで1時間弱、美濃戸口に降り立つ、実に30数年振りで当時の様子は全く覚えておらずこんなだったかなあ？という感じ。どうやら雨も大丈夫そうなのでホッとすが美濃戸までの林道歩きはアブの総攻撃を受けながらの行軍となった、今年は花と虫の当り年である。美濃戸山荘でアブと格闘しながらサッと昼食を済ませ、南沢の登りにかかるがとたんにアブの数も減りやれやれである。数回沢を渡り返しながら徐々に高度が上がる、季節を問わず何度も通った道なのにやはり全く記憶がなく初めて歩く道の感じた。白河原から風を求めてそのまま川筋を進み行者小屋へ着く。チェックイン後小屋前で恒例のお楽しみ会である、稜線付近はガスに包まれ



がちだが雨が落ちてくる雰囲気はなく明日もせめてこの程度であってほしいと思う。翌朝体調いまいちのイイ様は待機をお願いして、6時

15分12名で出発、小屋裏から八ヶ岳の主稜線に一気に突き上げる急峻な地蔵尾根の登りにかかる。しばらくは



樹林帯に行く普通の登りだが上部になるに従い傾斜も増す、それだけに一歩一歩とグングン高度を上げる感触が味わえる、森林限界付近からはクサリ場も連続し適度な岩場

の雰囲気もある、背後には大同心、小同心、硫黄岳の爆裂火口壁、最奥の蓼科山が優美さを、反対側には大きく阿弥陀岳がせり上がりを見せている。登りついた主稜線は赤岳展望荘の僅か北側で、風がやや強い。展望荘で防寒対策をして赤岳本峰の登りにかかる。岩交じりの急な道だが、



道々の高山植物に慰められつつ高度を上げる。8時19分赤岳山頂着、薄曇りながら遮るもののないパノラマは素晴らしい。何度訪れても裏切られない山頂である、また今回



も赤岳山頂は好天というジンクスを更新することが出来ラッキーだった。雲流れる奥秩父連山、まるで墨絵の様に佇む富士山、高さを誇る南ア・白峰、駒千丈、鋸、間近に迫る権現編笠、阿弥陀や北八ツの峰々、遥かに望む北ア・槍穂の連なりなど、飽きることのない眺めを存分に楽しむ。それぞれの思いを記憶と写真に残し、去りがたい思いを断



ち切って下りにかかる。南へ岩っぽい縦走路を僅かに進み、右の阿弥陀岳方面へ岩稜を下る。岩場を過ぎると間もなく文三郎道分岐から右下に見える行者小屋目

指して一気に下る。急だが途中からは階段が続き再び樹林帯になると傾斜も落ち着く、途中まで登って来ていたイイ様と合流、行者小屋着。のんびり稜線を見上げながら昼食をとり、往路南沢を下るがこの頃には、日差しも強くなりすっかり梅雨明けを感じさせる雰囲気であった。美濃戸からは、昨日同様アブと格闘しながら13:45美濃戸口に無事下山。久しぶりの夏の赤岳だったが、やはり何度登っても良い山だった。チャン！チャン！